

# つなぐ 58

2020年秋号  
令和2年10月発行  
第15巻第4号  
(通巻58号)

地域医療を考えるペガサス情報誌



患者さまに寄り添う  
医療人を育てる。

Special

# どんなときも、 患者さまのために。

Pegasus  
Tsubasa

社会医療法人ペガサスは令和3年4月、長年の夢であった

看護学校（ペガサス大阪南看護学校…仮称）の

運営をスタートする。

これまで蓄積してきた

卒業教育（看護師免許取得後の教育）の

ノウハウをベースに、新たに

卒業前教育（免許を取得するための看護基礎教育）に挑戦。

卒業前から卒業までを一本のレールで繋ぎ、



馬場記念病院  
看護師（プリセプター）  
土井 来海



馬場記念病院  
看護師（プリセプティ）  
江戸 実奈



馬場記念病院  
看護師（プリセプター）  
藏本 祥子



馬場記念病院  
看護師（プリセプティ）  
吉田 花梨



馬場記念病院  
外科  
長谷川 毅



馬場記念病院  
研修医  
夏原 啓暉



ペガサスの思いや志を共有する看護師を  
育てていく計画である。

では、ペガサスの思いや志とは何だろうか。

それは、「患者さま第一」と

〈地域医療への貢献〉という二つを宣言する

『ペガサスの約束』に込められている。

いつも患者さまを真ん中にして、

目の前で困っている人のために、地域で暮らす人のために、

自分ができることを精一杯していこうという志である。

どんなときも、患者さまのために。

医療人に必要な心の教育に力を注ぐペガサスの取り組み、

そして、看護学校にかける情熱についてレポートする。



馬場記念病院  
看護師  
壽 綾



ペガサスリハビリテーション病院  
看護師  
谷 裕美子



馬場記念病院  
看護部副部長  
紀ノ岡 真弓



馬場記念病院  
看護師  
竹下 靖子



馬場記念病院  
看護師  
菅 愛由美



ペガサス法人本部  
理事・企画運営局局長  
田中 恭子



馬場記念病院  
外科部長 兼 副院長  
寺岡 均



# 患者さまを思う人を育てる。 看護師編

馬場記念病院とペガサスグループは、毎年多くの新卒看護師を迎え、一人前の看護師になるまで丁寧な教育している。まずは、入職式・新入職員研修の様子から、物語をスタートしよう。

## 特別な年、 特別な入職式を 迎えて。

令和2年4月、ペガサスグループは112名の新しい仲間（看護師39名）を迎え、4月1日から3日まで、感染予防に最大限配慮し、入職式と新入職員研修を行った。新型コロナウイルス感染症が拡大するなかにおいて、勇気と覚悟を持って医療の世界に飛び込んできた若い仲間たち。その表情はみずみずし

い輝きに満ちていた。

社会医療法人ペガサス理事長の馬場武彦は、ソーシャルディスタンスを超えて伝わってくる若いエネルギーを感じながら、メッセージを届けた。「私たちが大切にしている理念は『ペガサスの約束』です。ペガサスでは、すべての真ん中に患者さまがいます。その思いを忘れずに、業務に励んでください」。

また、今年も新人教育がスタートする。そんな感慨を覚えながら、馬場は九州大学医学部附属病院（現九州大学病院）

の勤務を辞して、馬場記念病院に戻った頃のことを思い出していた。

## 故・和田副院長と 交わした約束。

経営の悪化した病院を立て直すために、馬場が病院に戻ったのは平成4年。馬場は組織改革を決意し、多くの職員たちと会話を重ねていった。

そのなかに、当時、看護部長を務めていた和田裕子がいた。



令和2年4月1日、ペガサスグループは112名の新しい仲間を迎え、入職式が行われた。

いつか自分たちで看護学校を。  
馬場理事長は故・和田副院長と  
交わした約束を回想していた。



新型コロナウイルスに対し、細心の感染予防策を講じて開催された入職式。  
馬場武彦理事長から新入職員へ、入職の辞令が授与された。

和田は大阪府内の看護師養成教育の第一人者として、長年貢献した人物。大阪市立大学医学部附属看護学校を経て、大阪市立桃山看護専門学校で教務主任を退官し、馬場記念病院に赴任。その後も終生にわたって、看護師教育に情熱を注いだ。和田は、患者さまの身体の機能や生理だけでなく、精神面や社会的な面まで気を配って患者さまを全人的に支える看護を持論として持ち、スタッフたちに説いていった。しかし、現場で経験を積んできた看護師は、どちらかという医師の補助に徹する人ばかり。教育界からやってきた和田の教えは、なかなか受け入れられなかった。当時副院長だった馬場は、看護師教育に苦勞する和田の背中を熱心に押し続けた。「和田さんの考えは正しいと思います。私は、ここを当たり前の正しい医療を提供できる病院にしたいんです。そのためには、医師中心ではなく、患者さんを中心にした組織に変えなければなりません。和田さん、応援しています。看護部をもっと良くしてください」と励ました。

和田と馬場は、看護部や病院全体の改革のためにいろいろなことを話し合った。そのなか



「看護の面でも高く評価される病院にしたい」。  
看護師教育に情熱を注ぎ続けた故・和田副院長。

で和田はよく、こんな話をしたという。「病院の基本は、人材教育です。入職後の卒業教育も大切ですが、その前の学生のところから一貫して看護師を育てることができたら、より一層同じ思いを持つ人材を育てられます」

す。将来はぜひ、法人で看護学校を作ってください。その言葉にいつも馬場は、「いいですね。ぜひ作りましょう。約束します」と答えた。

その約束はいよいよ令和3年、実現することになる。



## 新人を先輩看護師が マンツーマンで 指導する体制。

看護学校運営に向けて、ペガサスでは今、急ピッチで準備を進めている。その話は後半で紹介

介することに、まずは、ペガサスで今、どんな看護師教育が行われているか見ていきたい。

最初に紹介するのは、北館4階病棟（呼吸器・循環器科）に配属されたプリセプティ（新人看護師）の吉田花梨とプリセプター（新人看護師の教育係）の



(右)プリセプティ(新人看護師)の吉田花梨看護師。  
(左)プリセプター(新人看護師の教育係)の藏本祥子看護師。

藏本祥子である。馬場記念病院では、プリセプティを、少し上の先輩であるプリセプターが教育したり、相談に応えたりする体制を整えている。

吉田は命に関わる循環器科に興味があり、この病棟を志願した。しかし、心電図や心臓カテーテル検査など専門性が高く、わからないことも多い。それらをまとめてへわからないことリストを作って、藏本に提出するのが、吉田の日課となっている。「藏本さんにへわからないことリスト」を見せると、理解できるまで丁寧な教えてくれます。また、藏本さんは勉強熱心で、循環器看護の専門書も貸してくださいます。とてもありがたいですね」と吉田は言う。「わからないことリスト」を見る藏本もまた、基礎知識を振り返るこ



### 先輩看護師からのアドバイス

#### 患者さまの思いがわかる看護師へ。

プリセプターのみならず、プリセプティの心の拠り所になって本当によく頑張っています。私は上級の看護師として、何か問題はないか目配りしています。

若いスタッフに望むのは、「患者さまの思いがわかる看護師になってほしい」ということです。私自身もそうなりたいと思って努力してきましたが、昨年、自分が入院したことから、患者さまを思う難しさを改めて実感しました。患者さまにとって、看護師の言葉や行為の一つひとつが、気持ちや症状の回復にも影響を与えます。私自身ももっと精進して、患者さまやご家族に寄り添っていきたく思います。



菅 愛由美  
(北館2階B病棟:脳神経外科)

### 知識や技術以上に 大切な コミュニケーション能力。

現在はリーダー職として、患者さまの入退院支援や病床の

とができ、非常に勉強になるという。「小さな疑問も残さず聞いてくれる吉田さんは、とても素晴らしいと思います。その素直さを大切に、技術先行にならず、患者さまとご家族に心配りのできる看護師になってほしいですね」と話す。

管理を担当する藏本。仕事で心がけているのは、患者さまやご家族の情報を細かく収集すること。たとえば、ご家族の介護の意思や介護力の有無が、退院後の生活を左右するからだ。実は藏本は以前、豊富な知識と技術を持つ看護師こそ理想の姿だと考えていた。しかし今、その思いは一変したという。「看護師にとつて専門知識や技術は大切ですが、でもそれ以上に、コミュニケーション能力が重要だと今は考えています。患者さまやご家族の思いをしっかりと聞き、その

## 先輩看護師からのアドバイス

### 枠にとらわれない看護師へ。

後輩には、患者さまやご家族とのコミュニケーションを大切にしよう指導しています。今はコロナ禍で面会制限があり、ご家族と接点を持ちにくいのですが、着替えなどを持ってこられた際に、何か安心していただけるような声かけをするようアドバイスしています。

また、高齢の患者さまは一人ひとり違い、それぞれの抱える問題も多岐にわたります。そして、医療や療養生活の選択肢もいろいろあり

ます。そこで、患者さまを臨機応変にケアしていくことが大切。枠にとらわれすぎず、柔軟に対応できる看護師でありたいと思っています。



竹下靖子

(北館2階A病棟・脳神経外科・  
脳卒中ケアユニットを含む)

意思を尊重しながらより良く生活できるようにアドバイスする力。そういう力をもっと鍛えて、生活まで支援できる看護師になりたいですね」と話す。

コミュニケーションの大切さは、吉田にもしっかりと伝授されている。「どんなときも、患者さまにやさしく声をかけることを意識しています。たとえば、食事するときに会話がないと味気ないと思うんです。とくにミキサー食の場合、原形もわかりません。そこで、食事介助では、次はご飯、行きますね、次は野菜

もう一つのケースとして、救急外来の看護師たちを紹介したい。今春入職したプリセプティの江戸実奈と、今年初めて

### 救急医療の最前線で患者さまを思う。

ですよ、とお話するようにしています。また、看護師が不安な顔をしていると、患者さまも不安になりますから、いつも笑顔が心がけています」と、吉田はとびきりの笑顔を見せた。



(右)プリセプティ(新人看護師)の江戸実奈看護師。

(左)プリセプター(新人看護師の教育係)の土井来海看護師。

プリセプターになった土井来海(くるみ)である。

土井の指導法は、先輩仕込みだ。「どう思う?なぜそうするの?」とケアの要所所で投げかける。たとえば先日、脳出血の患者さまが救急搬送されてきた。医師は「130mmHg以下で血圧をコントロールしてください」と指示し、江戸は「は

い」とキビキビ答えた。傍らにいた土井は、素早く「どうして130mmHg以下にするとと思う?」と確かめる。江戸は少し考えをめぐらせ、「血圧が高くなる」と再出血のリスクに繋がるからです」と答えた。その答えは正しい。さらに、その根拠についてもう少し調べてノートを提出しよう土井は指示した。

「私も1年目、プリセプターからどうして?なぜ?」としようちゅう聞かれました。答えられなくて悔しい思いもしましたが、おかげでとても成長できました。江戸さんにも同じように成長してほしいと思っています」。その思いに応え、江戸は「土井さんの指導は、私の能力を引き出そうとしてくれるのがわかって、すごく励みになります」とほほえむ。

### この患者さまは暮らしているだろう。

土井は、救急外来の患者さまに接するとき、何か重大な病気が隠れていないか、慎重に情報収集と観察を行い、的確に医師に繋ぐことを心がけている。また、幸い、診察の結果、そのまま帰宅できる患者さまに対しては、自宅に帰っていただいて大丈夫かどうか情報収集に力を入れるという。

たとえば、一人暮らしの高齢男性の場合、土井はさりげなくこんなふうに話しかける。「昨日は何を食べられましたか」「そのメニューは、自分で作りになったんですか」。このように聞くと、患者さまの自炊



(上の写真)業務の合間に、江戸の質問に答える土井。困っていることはないか、いつも声をかけるようにしているという。  
(下の写真)看護部教育委員会では、各病棟から選出された教育委員が、さまざまな集合研修の企画・運営を行っている。





「患者さまを一人の生活者として支えられる看護師を育てていきたい」と、紀ノ岡真弓看護部副部長。

能力や、ヘルパー利用の有無などを想定できる。万一、食事をきちんと取れていなかったり、認知症などの心配がある場合は、MSW（医療ソーシャルワーカー）に相談することもあるという。

2年前から、救急外来では、社会資源活用パンフレットを65歳以上の患者さまに手渡ししている。これは、介護老人保健施設、通所リハビリテーションなど、ペガサスグループのサービスを紹介するもの。土井自身も、介護の申請や介護認定などについて勉強し、ひと通り説明できる知識を習得したという。「医療だけでなく、介護や福祉のサービスを繋げるように努力しています」と土井は話す。

江戸もまた、そんな土井の姿に触発され、生活への意識を高めている。「救急外来では、病気だけを見ればいいと思っていたが、大切なのは患者さまの生活背景まで考えることでした。たとえば、認知レベルが落ちていて、独居で、社会資源を全く使っていないという高齢の方が帰るとなると、そのままでは不安です。何とか社会資源に繋がなくては…と考えるようになりました」と話す。

### 患者さまと 目線の高さを 合わせられる看護師に。

看護部では、故和田副院長の教えを受け継ぎ、患者さま

の人柄や生活まで配慮してケアできるスタッフの育成に力を注いでいる。看護部副部長・紀ノ岡真弓に話を聞いた。「和田前副院長はペガサスの約束に基づいて、看護理念と看護方針を定めてくれました。へぬくもりのある、ゆきとどいた看護の提供」という看護理念は、とてもいい言葉ですし、スタッフみんなの心に刻まれていると思います。看護の仕事をしていると、つい目の業務に追われてしまいがちですが、患者さまを大切に思い、ゆきとどいた看護を提供できるように、スタッフを指導しています」。

患者さまに寄り添っているかどうか。そのことは、患者さまと会話する目線の高さを見れば、一目瞭然だという。「患者さまが椅子に座っているとき、ベッドで休まれているとき、それぞれ上から覗き込むのではなく、自分が屈んで、目の高さを合わせて話しているのを見ると、誇らしく思います。患者さまの立場で考えている証拠ですね」と紀ノ岡。

また看護部では、急性期病院から在宅までを結ぶペガサスグループの強みを活かし、継続性のある看護を提供できるスタッフの育成に力を入れている。

「継続看護の視点を深めてもらうために、病棟では多職種のカンファレンスを頻繁に開催しています。院内の多職種はもちろん、ケアマネジャーやヘルパーなど法人内の在宅部門のスタッフも交えて、退院事例の検証などを行っています。病棟のスタッフはそこで初めて、退院後の生活の課題を知り、病棟だけを見て看護してはだめだ」と気づいているようです」と紀ノ岡。馬場記念病院では、こうした多職

種の関わりを通じて、継続看護への意識を刷り込んでいるという。さらに紀ノ岡は次のように抱負を語った。「中堅以上の看護師には、そうした多職種カンファレンスでもっと発言力を高めていってほしいですね。患者さまの一番そばに居るのは、看護師です。看護師が患者さまやご家族の思いをよく理解し、多職種へと繋げるキーパーソンとして活躍できるように、さらに教育の充実に取り組んでいきます」。

#### 看護部教育委員会より

### お互いにモチベーションを高め合う新人集合研修。

入職1年生の学びを側面支援するために、月1回の集合研修を実施。与薬の技術や褥瘡予防など、毎回テーマを決めて知識を深めています。そのなかで心がけているのは、受け身の講義だけではなく、1分間スピーチやグループディスカッションの時間を設けること。新人たちが率直に意見を述べ合うことで、お互いのモチベーションを高め合うよう工夫しています。1年間経つと、ほぼ全員が自分の意見や看護観をしっかりと伝えるようになり、患者さまへの思いもぐんと深まります。その見違えるような成長ぶりが、私たちの何よりの喜びです。

#### 看護教育委員会・ 新人研修担当

谷 裕美子(左)  
(ペガサス  
リハビリテーション病院)

ことぶき  
壽 綾(右)  
(北館2階A病棟)



# 患者さまを思う人を育てる。 研修医編

患者さまを思う人を育てるという姿勢は、臨床研修医(以下、研修医※)教育の現場にも反映されている。診療科ローテーションで外科に配属されている(取材時)研修医と指導医の姿を追った。

※医学部を卒業し、医師免許を取得した医師は、卒業後2年間、臨床研修医として病院内のさまざまな診療科を順番に回って、基本的な診療能力を学ぶことが義務づけられている。馬場記念病院は臨床研修指定病院として、毎年、研修医を受け入れ、教育に力を注いでいる。

た、風通しのいい風土に魅力を感じたからだという。夏原医師の外科での指導医は、長谷川毅医長である。診断から手術、その後の管理までの一連の流れを夏原医師と一緒にやっている。

夏原啓暉(ひろき)医師は平成31年、広島大学卒業。研修医2年生である。馬場記念病院を選んだのは、地域に根ざした病院で地域医療を学ぶため。ま

長谷川医長の診療スタイルは、積極的に患者さまに会いに行くというもの。患者さまを診て、小さな変化を見逃すことな

く、必要な処置を的確に行うよう努めている。「同じようにやってみよう」。そう考えた夏原医師は一日に数回、ベッドサイドに足を運ぶ習慣が身についたという。「最近では患者さまのタイプに合わせて、話し方や聞き方を変えるよう工夫しています。たとえば、こうしてほしいと言える方にはよく話を聞くようにして、痛みを我慢されるような方にはじっくり本音を聞き出すよう心がけています」と夏原医師。

また、夏原医師は多職種の間わりにもいい刺激を受けている。「たとえば、セラピストの皆さんから、リハビリテーションや嚥下機能の評価方法などを教えてもらうこともしばしば。多職種みんなの力を総動員して、患者さまを退院へ導いていく流れを学んでいます」(夏原医師)。



(手前)外科において指導医を務める長谷川毅医長。  
(奥)研修2年目の夏原啓暉医師。





「1日に数回、患者さまに会いに行くよう心がけています」と夏原医師。  
患者さまの話を丁寧に聞いて、症状の回復を確認する。

とにかく  
早く動け、と  
いう教え。

長谷川医長が常々言っているのは、「早め早めに動け」というアドバイスだ。

たとえば、在宅医療チームに紹介状を書くのもその一つだ。

「患者さまのADLの改善を予測し、いち早く紹介状を用意することで、少しでも退院が早くなります。患者さまが帰りたい、帰れる、というタイミングで、必要な手続きは全部揃っていることをめざしています」と、長谷川医長。その教えは、夏原医師の心にしっかりと届いて



寺岡 均部長。

いるようだ。「研修を通じて、退院に向けてどういう調整が必要か、多職種の動きを一通り理解できたのは大きな収穫でした。この経験を活かし、患者さまの全身を診て、生活復帰を支援できる医師になりたいですね」（夏原医師）。

外科の寺岡 均部長（兼馬場記念病院副院長）は、二人の成長を温かく見守っている。「夏原先生については、研修医だからといって、特別扱いしません。緊急手術もカンファレンスもすべて参加してもらい、外科医の大変さも喜びも実感してもらっています。一方の長谷川先生はもともと後輩指導に熱心で、非常に優秀です。夏原先生を教えることにより、自分自身もさらに成長するんじゃないか、という期待を込めて、指導医に抜擢しました。その期待に応え、手術中の技術も含め、とても熱心に指導してくれています」と目を細めている。

「患者さまが  
一日も早く退院して生活を取り戻すには  
どうすべきかいつも考えます」と、夏原医師。



研修医にとって、手術は貴重な学びの場。研修医は細かい血管や神経の走行などを実際に見て、解剖学を頭に叩き込む。



手術後は、夏原医師が手術記録を書いて、長谷川医長が細かくチェック。復習までしっかりすることで、手技を自分のものにしていく。

## それぞれの部署で、患者さまを見つめて成長する専門職たち。

### リハビリテーション部

#### 患者さまの生活を考えるセラピストを育てる。

リハビリテーション部では、高度急性期から急性期、回復期、生活期までの全領域を経験できるようローテーションを組み、より患者さまの生活を考えて良いリハビリテーションを提供できるよう指導しています。これからも、患者さまが一日も早く、元の生活に戻れるように知識と技術の研鑽に励んでいきます。

### 薬剤部

#### 顔の見える薬剤師として、患者さまに寄り添う。

薬剤師は、患者さまの近くにあります。病棟で服薬指導をすることはもちろん、患者さまの状態をアセスメントして、薬剤の効果を確かめることや副作用の早期発見に努めることも薬剤師の大切な役割です。医薬品の知識だけでなく、患者さまのために何ができるか考え、行動する薬剤師の育成に力を注いでいます。

### 臨床心理部

#### 患者さまの「こころ」に寄り添う専門家を育てる。

臨床心理士は患者さまの「こころの問題」にアプローチする職種だけに、常に患者さまを深く見つめています。患者さまにお話を聞く際は、現在の生活はもちろん、必要であれば生育歴についても聴取するよう指導しています。これからは学術研究にも力を入れ、質の高いサポートをめざしていきます。

### 検査部

#### 患者さまの不安な気持ちに寄り添って。

患者さまに接する機会が多い生理機能検査では、個々の不安な気持ちに寄り添い、丁寧な説明と接遇を心がけるよう指導しています。また、ベガスセミナーなどを通じて、患者さまとお話する機会を増やし、患者さまの思いを感じるよう心がけています。

### 医療機器管理 (ME) 部

#### 患者さまの命を守る使命感を貫く。

ME部の使命は、ベガスグループ全施設の医療機器の操作・保守を行い、安全な医療提供を支えること。臨床工学技士が患者さまに接する機会が多くありませんが、命に直結する機器を扱うという自覚を持ち、責任を全うするよう指導しています。また、他職種との関わりを通じ、患者さまへの思いを深めています。

### 栄養部

#### 患者さまの早期退院を意識できるスタッフを育てる。

栄養部では管理栄養士を各病棟に配属し、病状や口腔環境に応じた食事をご提供しています。食事も重要な治療の一環と考え、スタッフには患者さまの早期退院を意識して食事を提案するよう教育しています。また、退院前の栄養指導や相談、訪問栄養指導などを通じて、患者さまの生活への関わりを広げています。

# 人を思う「人」を、 ゼロ年生から育てたい。

ペガサスでは令和3年の春から始動する看護学校の運営に向けて、広報活動や教育体制づくりに取り組んでいる。その取り組みについて、またこれからの抱負について話を聞いた。

## オープンキャンパスで 高校生たちを迎える。

冒頭で紹介したように、ペガサスはペガサス大阪南看護学校（仮称）の事業者として、令和3年4月（予定）の入学生から教育を行うことが決まっている。そのための広報活動として、この夏、全4回にわたり、感染対策を徹底した上で、ペガサスオリジナルプログラムによ

るオープンキャンパスが開催された。

ここでは、認定看護師から看護師のキャリアアップの話、看護師の先輩たちが見本となって、フィジカルアセスメント（血圧測定・聴診）、沐浴、ベッドメイキングの基礎看護技術の体験を実施した。集まった高校生たちに看護学校開設の担当理事を務める田中恭子（ペガサス法人本部理事・企画運営局長）はこんなふうに話しかけた。

「このコロナ禍にあつて、看護師をめざそうという皆さんに敬意を表します。新型コロナウイルス感染症はまだワクチンもなく、有効な治療法も確立されていません。私たちペガサスの職員も、いつ感染するかわからない、という恐怖や不安を感じながら、それでも医療人としての使命を果たそうと頑張っています。ただ、医学的な知識に基づいて感染予防対策を徹底すること、一時期に比べ落ち着いてきました。（中略）今日は、看

「患者さまの生活まで考える姿勢を早い段階から学んでほしい」と田中恭子理事。







## 「どんなときも

## 患者さまのために」という ペガサスの思いを共有したい。

では、馬場が職員で共有しようとする〈思いや志〉とは何だろうか。「それはやはり『ペガサスの約束』に込められていると思います。いつも患者さまを真ん中にして、病気やケガで苦しむ患者さまやご家族、地域で療養する人々のために全力

を尽くそうという思い。その情熱を共有できる人たちと一緒に、このペガサスグループを発展させていくことが私の願いです。日頃はお互いに違う専門職として違う領域で力を発揮していても、いざ患者さまのため、地域のために必要なことであれば、全員が同じベクトルに向かつて動き出せる、そんな集団でありたいと考えています」と話す。

馬場自身も患者さまを診療

するとき、常に考えるのは「目の前で困っている、この方のため何ができるだろう」ということだという。「いろいろ治療しても痛みが取れない方であれば、どうにかして痛みを緩和できないかと考えます。何も考えず『治療法はないですね』と言ってしまふ医師にはなりたくないですね。また、私は脳神経外科医ですが、違う領域でもできることはないか考えます。専門性は大切ですが、専門性に凝り固

まるのも良くないと考えています」と馬場は話す。

しかし、思いを共有することは、全職員を型通りにはめよう、というものではない。「金太郎飴のように似た人材が集まるのは面白くないですね。また、人間ですから、当然それぞれに短所もあります。短所を補うというよりも、長所や個性を伸ばしやかに育てていく場所でありたいと考えています。もちろん、それぞれの根底には、人へのやさしさ、思い

やり、気遣いがあることが絶対条件になります」（馬場）。

医療人は、学校で学び始め、就職後も新しい知識や技術を吸収しながら、生涯にわたり学んでいく職種である。「看護学校が始まれば、学びの最初の一步を共に踏み出し、その後の成長にずっと伴走することができます。どんな仲間と出会えるか、本当に今から楽しみでワクワクしています」。そう言うて、馬場は笑みをこぼした。

## ペガサスの約束

すべての真ん中にいるのは、患者さまです。  
はりつめた瞬間も、案ずる時間も、  
そしてゆるやかな日々も、ともに過ごします。

すべてを支えているのは、人と、町とのきずなです。  
どこから見ても、誰にでも、よくわかる病院であり続けます。

ふるえる心に、よりそい。  
待ちわびる思いへ、語り。  
新たな願いと、手をたずさえ。

一つひとつの生命を、まっすぐにどこまでも見つめていきます。





ヘガサ大阪南看護学校(仮称)

# 地域医療を支える診療所。 皆さまを最適な医療へと繋ぐ。

ペガサスは、地域の診療所と連携を図っています。

診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。

丁寧な診察による適切な診断・治療を行うとともに、

専門的な検査・治療が必要と判断した際には、患者さまに病院を紹介して下さるなど、

皆さまにとっては一番身近な存在であり、

「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理して下さいます。

第二特集では、こうした診療所をご紹介します。※診療所はアイウエオ順で掲載

**患者さまの「幸せな選択」を  
お手伝いするために。**

診療所

体の不調について

何でも相談できる

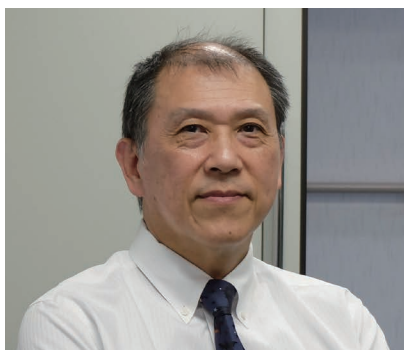
かかりつけクリニック。

**病状や治療法を  
わかりやすく説明。**

堺市中区の古くからある住宅街に位置する、神元クリニック。エレベーターを上がり扉を開けると広々とした空間が広がり、待合室から診察室、トイレまで、すべてバリアフリーの配慮

が行き届いている。開院は平成15年。以来、患者さまとの信頼関係を築きながら、地域にしっかり根を下ろしてきた。

「身近なかかりつけ医として、風邪や胃腸炎などをはじめ、どんな病気もまんべんなく診療しています。とくに多いのは、私が専門とする循環器科の疾患、そして、高血圧、高脂血症、糖尿病などの生活習慣病です」と、神元章雄院長。診察で心がけているのは、病状や治療に



ついてわかりやすく話して、検査・治療などの方針決定に、患者さま自身に参加していただくことだという。「医療の進歩に伴い、治療法も増え、どんな療養生活を送るのかという選択肢も

いろいろあります。最終的に決めるのは患者さまですが、できるだけ納得のいく、幸せな選択

をしていただきたいんです。そのため、時間をかけてじっくり

話し合いをします」と、神元院長。話の最後には必ず、「自分

だったらこうします」という助言を添えて、患者さまに慎重に

判断してもらおうという。

**早期診断、そして、  
病診連携に力を注ぐ。**

神元院長は、幅広い疾患に

対応するため、検査にも力を注いでいる。心電図検査、呼吸機

能検査、超音波検査（腹部、心臓）、X線撮影装置などを取り

揃え、一通りの検査ができる体制だ。「たとえば、生活習慣病

で通院している高齢者の方など

が、他の病気を発症することもよくあります。それを見逃さないようにするのが我々の仕事です。いわゆる早期がんを診断することも多いですね」。

早期に診断した後は、近隣の病院へ速やかに紹介している。

「クリニックには、身近にあつて

すぐに相談できるという長所

があります。でも、ここでできる

ことが限られていますから、大

きな病院との連携が大切です。

当院で完結するのではなく、病

診連携のもとで患者さまの健

康を支えるよう常に心がけて

います。馬場記念病院さんは、

検査や入院の依頼にも、いつも

きめ細かく対応してくださり、

本当に感謝しています」と、神

元院長は笑顔を見せる。

今後の目標は、連携先の病院

と、

と情報を共有し、レベルの高い医療を提供していくことだという。「医療の進歩はやっぱり、確実に人間を幸せにします。病院で導入された新しい治療法などは常に把握し、患者さまに紹介するよう努めています。最新の医療技術から、最も幸せな選択をしていただけるよう、これからもサポートしていきたいと思っています。



### 神元クリニック

院長：神元章雄  
所在地：大阪府堺市中区大野芝町180 神ビル2階  
TEL：072-235-7711  
URL：<http://www.kamimoto-clinic.com/>  
診療科目：内科・循環器科

## 在宅療養中の患者さまを支え、 健康管理から看取りまで力を注ぐ。

診療所

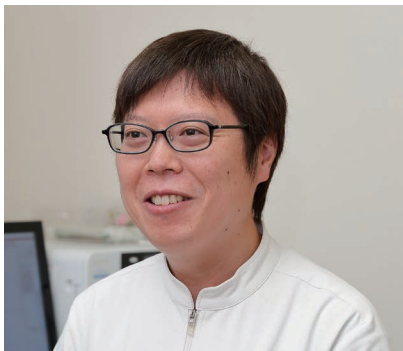
どんなご相談にも  
親身に耳を傾け  
心と体の悩みを解決。

丁寧に話を聞いて  
丁寧に診察する。

介護付有料老人ホームエテルノテレサに隣接する、よしかわ健やかクリニック。ホームと共通の門をくぐって敷地内に入るため、外からは少しわかりにくいですが、誰でも自由に来院できるクリニックだ。

開院は、令和元年10月。「地

域の皆さまの健やかな毎日に貢献できるように」という思いが、名称に込められている。院長の吉川信彦医師は大病院に長く勤務し、さまざまながん患者さまの放射線治療に携わってきた。その豊富な臨床経験をベースに、現在は一般的な内科疾患はもちろん、高血圧、高脂血症、糖尿病などの生活習慣病まで幅広く対応。さらに心療内科を標榜し、うつ病や不安症などで悩む患者さまを支えている。「診療で心がけていることは、どんなご相談にも親身に



応えることです。まずは症状をよく聞いて患者さまと一緒に解決策を考えます。日常的な健康問題の大半は当院で解決できますが、精密な検査や治療が必要な場合は適切な病院にご紹介しています」(院長)。

患者さまの多様な体調不良に因應するために、自己研鑽も怠らない。地域の勉強会、研修会はすべてチェックし、積極的に足を運んでいるという。「先生に相談してホッとした、と言っていただけるとうれいすね」と吉川院長はほほえむ。

### 24時間365日体制で 在宅療養をサポート。

同院は在宅療養支援診療所として、訪問診療にも力を注ぐ。午前診と午後診の間の時間を利用して、近隣の介護施設や個人宅など、合計80〜90人

の患者さまを訪問している。患者さまの症状は、認知症、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、末期がんなどいろいろ。ご家族の要望に応え、看取りまで引き受けている。「開院当初は、自分一人で行けるかどうか不安でしたが、ケアマネジャーや施設の看護師、介護スタッフ、薬剤師など、多職種の協力を得て、在宅療養中の方々を支えています。看取りについても複数の医師のネットワークを組み、24時間365日体制で対応しています」(院長)。

在宅医療のニーズは高まってきたが、地域の人々の訪問診療に対する認識はまだまだ低いという。「介護度が高くないと利用できないと思われがちですが、何らかの事情で通院できない方であれば、誰でも利用を検討することが可能ですので、遠慮せず電話してきてほしい」と話す。同院ではオンライン診療も導入し、多様な診療機会を用意している。「たとえば、病院嫌いで放っておいたら、糖尿病がすぐ悪化していたというケースもあります。さまざま診療方法がありますから、自分一人で抱え込まず、何でも気軽に「ご相談ください」と、院長はやさしい口調で締めくくった。



### 医療法人共幸会 よしかわ健やかクリニック

院長：吉川信彦  
所在地：大阪府堺市西区浜寺元町1-120-1  
TEL：072-269-0553  
URL：<https://kyousaikai-clinic.jp/>  
診療科目：内科・心療内科・放射線科

**pegasus 58**  
2020年秋号  
令和2年10月発行第15巻第4号  
(通巻58号)

### 地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦  
編集長 平岩敏志  
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ  
発行 HIPコーポレーション  
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244  
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

# つばさ 58

地域医療を考えるペガサス情報誌

いつのときも患者さま一人ひとりを見つめ、  
どこまでも寄り添い、支え、ともに歩む——。  
この思いを、私は法人の理念に刻み、  
地域社会に対する『ペガサスの約束』としました。  
正しい医療を提供する病院として、  
医療領域の充実に全力を注ぐとともに、  
生活へと視線を伸ばし、  
現在では介護・福祉領域にも挑戦を続けています。

そして今、行き着いたのは、〈人づくり〉です。  
専門知識・技術の研鑽はもちろん、  
コミュニケーション能力に優れ、人としてやさしく、  
のびのびとした個性と自立心を持つ。  
〈人としての心のありよう〉を自らに問い続ける。  
そうした職員の育成に全力を注いでいます。

人を育てる。人を育てる人を育てる。  
地域社会への約束を果たすペガサスの原動力です。  
今回ご紹介したのは、そのワンシーン。  
私たちの〈人づくり〉への挑戦は、これからも続きます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦